

佐々木味津三氏の素描

—あれこれの記—

今泉 昭郎

昨年、町文化祭の機に、作家「佐々木味津三の著作や転機について」金田喜兵衛氏の講演があり、氏の偉大さを知りました。

その後、克子夫人の三十五回忌「落葉集」に依つて氏の活躍・生活・気魄に魅了させられた。

味津三氏は、文学者にとつての登竜門である芥川賞、芥川龍之介氏との親交が厚く、また、文芸春秋創刊や、今日の発展への根幹構築に貢献している。

こうした活動の一方、夏目平氏に、雑誌創刊への五円か拾円の寄附を依頼した。私信がある。

バカゲテ寒い。何二モ出来ヌ
お正月が来タガ、ワシのウチ
デハ、モチガツケヌカラ（タカ
イゾ一切八錢位ハスル）ゾウニ
も食はぬ相談ヲシタ。

ソレデ、紙切デモチの形ヲコ
シラエテ、「コレハオソナヘデ
ス」とカイト床の間ニオク、オ
シメナワモナイカラ、紙ヲヨッ
テ、「コレハシメナワデス」と
かいて、ベタ々々ハットクツモ
リだ。

マサカ、モチガクヘヌカラト
イツテ、紙切ヲ雑煮のかわりに
することも出来ないから、ソレ
だけは、茶餉台ちやぶだいの上に、「雑煮
の鍋デス」といふハリフダヲシ
タ味噌汁ナベヲカザツテオク。

ソレデお正月ヲムカヘルツモ
リだ。

なにしろ俺ハ文明人過ぎると
思ふ。こうよくぼうが多いと、
どうも、紙のオソナヘモチの筆
法デ、ガマンヲスルコトヲ強ヒ
ラレル。ダカライヤニナル。ピ
ンボウハ、マア癩ニサワルヤウ
ナモノダガ今の世の中デハ、カ
ツエ死ハ鳥渡出来ヌ、救世軍の
モチ鍋デ、モチガクヘルピンボ
ウ人にナレバ、死ニハセヌヤウ
ダ。オレハマダ文明人ダ。ダガ

病氣ハ癩ノ骨頂ダ、コイツハ、
世間も手出シヲセヌカラ、救世
軍のモチデ、モチガクヘルピン
ボウ人にナレバ、死ニハセヌヤ
ウダ。オレハマダ文明人ダ。ダ
ガ病氣ハ癩ノ骨帳ダ、コイツハ、
世間も手出シヲセヌカラ、救世
鍋デハ、ヤクニ立タヌ。

ダカラ文明人モイヤニナル。
モウ喰フモノガナクナツタ。ソ
レハ、ワシノ口ニアフモノガナ
イノト、ゼニガナイカラダ。千
変一律ダトオレハ、アイソガツ
キル。セメテゼイタクヲシテナ

死ナウト思ツトルノヂヤ。
今ハ、ブリの切身が途法モナ
ク甘イガ、ソイツモ、今晚クツ
タラアイチマツタ。味噌汁ガ、
キラヒニナツタカラオカシイガ、
タバコハ仲々ヤメヌ。

コレカラスコシ、ワタシハオ
トナシクナルツモリダ。イヤソ
イツハネ、実ハ、世間二面ヲサ
ラスノガ、オックウニナツタカ
ラダ。

タイテイハ、コタツノ守だ。
ソレデヤメル。

一 平 様
味 津 三

「春ニナツタラオレモ
少シフンゾリ返ヘル。」
大正七年十二月の書簡

後進へ送る 四カ条
—作家修業について—

一、先づ多読すること。
なるべく多種類のものを多読
以上に乱読する方がいい。なぜ
ならば多く渉り多く読むことに
よつて、いくつかの人生といく
種類かの人間苦乃至は人間愛を
手つ取り早く知りうるからです。

宇野浩二氏の小説を読んで、
ヒステリーの妻君に悩まされる
男の人生がどんなに悲惨である
かをまのあたり知らるる如きも
一つです。或は武者小路実篤氏
の作品を読んで、人道主義にの
み溺れる主人公の人生がどんな
に安価にどんなに浅薄であるか
を教へられるごときもその一つ
です。また、室生犀星氏の作品
を読んで、典雅枯淡の人生とい
ふものがどんなにしじみとし
た味のものであるかを知り得る
ごときが好適例です。

二、つねに自分の個性を生かせ。
凡そ個性を生かすことは、文
学の上に限らず人生航路第一の
標識です。しかも個性を生かす
ことは、必ずしもその文章にお
のれ自身のスタイルをつくり、
おのれ独自の色彩を持つことば
かりではないのだから事重大で
す。寧ろ色彩スタイルは未技で
す。先づ個性を生かすには独自
の心境、独自の観方―僕の平生
使用している言葉で言へば、お
のれ一人だけの鉾脈を発見する
ことが急務です。

三、よき空想家となりたまへ。
空想は即ち夢です。夢を持た
ない人生に厚味がないごとく、
空想することを知らぬ人はせつ
せと畑でもほじりなさい。僕は
つねにこんな言葉さへもこしら
へてゐる位です。よりよき作家
とは、よりよき空想家の謂であ
る。

四、原稿を書いて金に

することを考へたまふな
これは一番卑近な警告で、一
番重要な警告の一つです。実際
習作をする場合に、先づいくら
になるかと金の計算をしてみる
ほど文学を毒する考え方があり
ましようか。たに金銭を計算
するのみが作家修業を毒するば
かりではありません。どう言つ
て批評されるか、どんな評判が
まきおこるか、それさへも念頭
におくことは大の禁物です。実
際またさうではありませんか。
ものを書くと言ふことは要する